

《研究報告》

アラブ革命以降のイスラーム政治思想の新動向：  
ハーリド・アブルファドルにおける「イスラーム民主主義」批判と  
「シャリーアの目的論」の連関を手がかりに

黒田彩加\*

Islamic Political Thought after the Arab Uprising:  
Post-“Islamic Democracy” and the Role of the Theory of the “Objectives of  
Shariah (*Maqāṣid al-Sharī‘a*)” in Khaled Abou El Fadl’s Political Thought

Ayaka KURODA

This brief research report explores the development of Islamic political thought in the post-Arab Spring. While investigating “the moderate Islamic school” in Egypt, the author found that many Arab Muslim intellectuals have raised their voices in the West. Intellectuals who have migrated to the West, in particular, have been providing critical insights into the religious and political situations in their native countries. The author of this research report overviews Khaled Abou El Fadl, a prominent Egyptian thinker living in the US, and his intellectual career and ideas.

Abou El Fadl is particularly concerned about the decline of Islamic scholarly tradition as a result of the modernization, westernization, and colonization that Arab-Islamic countries have experienced. Furthermore, this decline has resulted in a lack of a critical culture within the Muslim world, a decline in the persuasiveness of Shariah as a common law, and the wide acceptance of a superficial understanding of Shariah. These points are reflected in his critique of Salafism and, by extension, his political thought.

While Abou El Fadl maintains that Shariah should be a common law in the Muslim world, he strongly opposes the state’s enforcement of Shariah law. He does not, however, want to be confined to ideological categorizations such as secularism or Islamism. Rather, he is focused on how moral values such as justice could be realized in a communal system and, ultimately, in the entire human society. His political

---

\* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構准教授  
a-kuroda@fc.ritsumei.ac.jp

thoughts are based on the theory of “the objectives of Shariah (*maqāṣid al-sharī‘a*) ,” which focuses on the ultimate values that Shariah aims to realize and protect, rather than the specific legal provisions.

Ten years after the Arab Spring, the connection between politics and religion has stagnated as Islamist forces have experienced political defeat or repression in many Arab countries. However, as shown by the ideas of Abou El Fadl and other Muslim intellectuals, attempts to enhance political discourses using Islamic vocabularies or the theory of “the objectives of Shariah” continue today. These intellectual attempts, which do not necessarily aim to Islamize the public sphere, could hold the key to understanding recent developments in Islamic political thought.

キーワード：イスラーム政治思想、イスラームと民主主義、ポスト世俗主義、  
シャリーアの目的（マカーシド・シャリーア）論、エジプト

Keywords: Islamic political thought, democracy, post-secularism,  
the objectives of Shariah (*maqāṣid al-sharī‘a*), Egypt

## 1. はじめに

本研究報告は、アメリカ在住のエジプト系ムスリム知識人であるハーリド・アブルファドル（Khaled Abou El Fadl, 1963年～）の思想を手がかりに、筆者がこれまで進めてきた現代イスラーム政治思想研究の進捗と展望を報告するものである。

2011年の「アラブの春」（アラブ諸国に広がった民主化運動）による政治変動は、エジプトのみならず各国で政治と宗教の関係の問い直しを迫った。その後、各国でのイスラーム主義政権の挫折、過激派組織の台頭と衰退、アラブ諸国における言論統制の強化などを経て、現在のイスラーム政治思想はどのような展開をみているのだろうか。筆者はこれまで、エジプトを主たる研究対象地域として穏健派のイスラーム政治思想の研究を進めてきたが（黒田, 2019）、欧米で活躍するアラブ出身の知識人も視野に入れ、アラブ諸国の政治変動をめぐる彼らの発言を分析することで、イスラームと政治をめぐる現在の思想状況の一端を解明できるのではないかと考えている。

20世紀後半以降、アラブから北米に活動拠点を移した著名なムスリム知識人の例として、パレスチナ出身の学者イスマーイール・ファールキー（1986年没）、イラク出身で、エジプトで宗教教育を受けたターハー・ジャービル・アルワーニー（2016年エジプトにて没）、宗教間関係に深い関心を持ち、大部のクルアーン注釈書を刊行したエジプト出身の思想家ファトヒー・ウスマーン（2010年没）らがいる。これらの知識人は、自らの出身地であるアラビア語圏で活動する知識人たちとのつながりを強く保ちつつ、北米のムスリム・コミュニティを対象とした活動や、アメリカの言論界に対する思想発信を続けてきた。

本研究報告でとりあげるハーリド・アブルファドルも、1980年代以降アメリカに拠点を置き、世界的にも著名なムスリム知識人として活動を続けている。イスラーム法、女性、民主主義などのテーマを扱った著作を英語で発表しており、その一部はアラビア語や日本語（アブ・エル・ファドル, 2008）にも訳されている。思想家としては、アラブ・イスラーム世界の近代化や知のあり方に対す

る批判、過激派に対する批判などの重要な改革的提言を行っている。以下では、アブルファドルの経歴や思想家としての問題意識を紹介した後に、彼の政治思想を概観し、研究の展望を述べたい。

## II. ハーリド・アブルファドルの経歴と問題意識

ハーリド・アブルファドルは、1963年にクウェート在住のエジプト人家庭に生まれた。父ミドハトはムスリム同胞団員であり、時代背景を総合すると、エジプトでの政治的弾圧を逃れ、湾岸に拠点を移していたことが推察される。

アブルファドルはエジプトとクウェートで、いわゆる近代的な世俗教育のかたわら、ハラカ(halaqa)と呼ばれる場を利用して集中的な宗教教育を受けた(Abou El Fadl, 2014: 23)。ハラカとは、アラビア語で「環」を意味することばであり、教師を中心として車座になって教育を受けるアラブ世界の教育システムを指す。ただし、伝統的な宗教教育施設であるマドラサとは異なるインフォーマルなシステムであり、彼はウラマーとなるための正式な訓練を受けたわけではない。アブルファドルはこの「ハラカ」の場を、国家から独立した教育が行われる場として高く評価しており、彼の宗教-国家観を知る上で興味深い。

アブルファドルは1982年にアメリカにわたり、イエール大学で学んだのちペンシルヴァニア大学で法学修士号を取得、最終的にはプリンストン大学でイスラーム学の博士号を取得した。現在はカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)にて教鞭をとっている。そのかたわら、彼がかつて学んだハラカを模した団体「ウスーリー・インスティテュート」(Usuli Institute)を運営し、若い世代を巻き込んだ教育・研究活動を展開している。オンラインも積極的に活用しており、毎週金曜日の説教(フトバ)がオンラインで配信されているほか、講義録や視聴者から寄せられた質問に対して答えるビデオが定期的に動画サイトにアップロードされている。

祖国エジプトも定期的に訪れており、いわゆる「アラブの春」後の時期に、アズハル総長であるアフマド・タイブやエジプト元国家ムフティーのアーリー・ジュムアらの協力もあり、革命後のエジプトに滞在し、その社会状況を観察する機会を得ている(Abou El Fadl, 2014)。

英語圏で活躍するアブルファドルであるが、思想的には、アラビア語圏のイスラーム諸学の伝統の影響を強く受けている。中でもエジプト出身のウラマーであるムハンマド・ガザーリー(1996年没)を高く評価しており、根拠が脆弱なハディースにとらわれるムスリムの反知性主義を批判する姿勢を継承している<sup>1</sup>(Abou El Fadl, 2014: 261-267)。

これに関連して、アブルファドルの思想家としての問題意識の根底にあるのが、(1) アラブ諸国の近代化や西洋化、ひいては植民地化の結果としてもたらされた、イスラーム諸学の地位の低下、(2) ムスリムの間でのシャリーア(イスラーム法)の地位の低下や表面的な理解の広がり、(3) 上記に関連して、20世紀後半以降のサラフィー主義(宗教的厳格派)の影響力の増大、ならびにムスリムの間に蔓延する反知性主義、といった相互に関連する問題群である。彼はこの状況を、「1960年代から70年代にかけてのイスラーム思想の質の劇的な劣化」(Abou El Fadl, 2014: 66)とまで表現しているが、これらの問題に対処するために、かつてイスラーム法学者たちが行っていた、理性に

<sup>1</sup> Moussa (2015)によれば、アブルファドルはガザーリーのもとで学んでいたことがあるというが、両者の交流の詳細は定かではない。

よるシャリーアの理解の復権や、ムスリムの間での批判的文化の構築を訴え続けている。

### III. ハーリド・アブルファドルの政治思想：アラブの春、民主主義、国家と宗教教育

#### 1. 「アラブの春」に対する評価：「イスラーム民主主義」論を超えて

アブルファドルの政治思想に関しては、彼とスーダン出身の世俗主義の論客アブドゥッラー・ナイームのシャリーアと国家観を比較した短評 (Moussa, n.d.) が先行研究として存在する。彼をポスト世俗主義の論客と位置づけ、そのシャリーア観を紹介する点で、本稿にはムサーの短評と重複する部分もある。しかし筆者は、以下で述べるように、これまで穏健派のイスラーム主義者の間で唱えられてきた「イスラーム民主主義」論を超越する点、彼のシャリーア観がアラブ世界の近代化批判とも連関している点などにも、彼の思想の意義を見いだしている。

アブルファドルは、イスラームの究極の目的を「正義」と考えており、イスラームと民主主義の両立を訴える論客として知られている。一方、エジプト出身でカタル移住後に世界的に有名となったユースフ・カラダーウィー（2022年没）やチュニジアのラーシド・ガンヌーシーなど、1990年代以降に一部のイスラーム主義者の間で唱えられるようになった「イスラーム民主主義論」に対しては批判的であり、イスラーム国家の樹立という考え方そのものが偶像崇拝的であると論じる (Abou El Fadl et al., 2004: 120)。たとえばカラダーウィーに関しては、イスラーム学の訓練を受けているものの、民主主義の理解が表層的で、単に多数派の意思を反映する制度としてしか理解していないと批判している (Abou El Fadl et al., 2004: 121)<sup>2</sup>。一方アブルファドルは、イスラーム主義によく見られる、ムスリムを政治共同体の多数派としてナイーブにみなす論理を厳しく批判しており、集団的権利より個人の権利を保障することを志向している。

アブルファドルは、ムスリム諸国においてシャリーアが一律に適用されることを拒否するが、完全な政教分離を支持するわけでもなければ、イスラームと政治を結びつけようとする試みに無条件に反対しているわけでもない。

たとえば彼は、「アラブの春」を通じて、いずれの国でも「人びとが統治者を選び、排除し、統治者が自らの行為について説明責任を果たす統治制度のもとで生きる要請」が示されたと述べる。イスラーム主義者たちが力を持つ国も中にはあったが、イスラーム主義者も一枚岩ではないという認識のもと、革命そのものは、真にその土地に根ざした、ムスリム自身の伝統とかつての植民者たちの伝統の融和を構想する最初の機会となりえたはずだと論じる (Abou El Fadl, 2014: 102)。すなわち、アラブ諸国にとって真正な政治体制とはどのようなものかという議論が進むこと、さらにイス

<sup>2</sup> 1990年代のカラダーウィーの著作『国家の法学』——特に、女性の国家元首の是非に関するくだりを読むと、彼は民主主義の本質を「人民自身による好ましい統治者と秩序の選択」「統治者を監督し、道から外れた統治者を取り除くこと」「人びとが知らない、または同意しない経済的、社会的、文化的、および政治的な道に追いやられないこと」と定めている (al-Qaradāwī, 2001: 133)。カラダーウィーは同書で、女性の国会議員の登場や女性の国家元首を容認しつつも、「女性を統治者とする共同体は栄えない」（ブハーリー真正集）というハディースとの両立を図るために、女性の政治的権利に対してアンビバレントな態度を示している (Kuroda, 2021)。確かに同書でのカラダーウィーの民主主義の定義には未熟な点があるが、この評価を下すには、本書が約25年前の著作であること、カラダーウィーが本書を「民主主義は不信仰」と信じる読者も想定して執筆したということも考慮に入れる必要があるだろう。なお、Abou El Fadl (2001) は、上記のハディースを含む、女性差別的な論点をはらむハディースに対する批判的検討が主題となっている。

ラーム的伝統の中で使われてきた語彙を通じて民主主義をめぐる言説が形成されてゆくこと自体は、彼にとって望ましいことなのである。

部分的な言及にとどまるものの、アブルファドルは2011年の革命後にアズハルとリベラル系の知識人たちが共同で起草した文書「エジプトの将来に関するアズハル文書」を好意的に評価している (Abou El Fadl, 2014)。これは、「明白なイスラームの権威に基づく」十一の原則をまとめたもので、第一条ではエジプト国家の性格を「民主主義・立憲主義に基づく近代国民国家」とさだめ、第二条では「シュエラーの原則を実現する現代的様式である、自由・直接選挙に基づく民主主義体制」を擁護しており、総体としては、イスラーム思想とリベラリズムの合意点をまとめた文書となっている。

また、この文書は、エジプト、ひいてはスンナ派世界を代表する宗教教育・研究機構であるアズハルの組織的独立や人事権の回復を訴えたことでも知られている (長沢, 2014)。アブルファドルは、近代以降のイスラーム的学知のあり方、国家による宗教教育の管理を長らく問題視し、伝統的なイスラーム諸学の権威の低下こそが、サラフィー主義の台頭や宗教的不寛容を招いたと主張してきた。さらに、オイル・マネーによって支援を受ける過激派に対抗する手段として、近代以降、アラブ諸国で国家による接収が進んだワクフ制度を復活させ、過激派に対抗するための研究・出版の資金とすることさえも提案している (Abou El Fadl, 2007: 285-286)。国家からの宗教教育の独立を重視する彼の姿勢が、宗教機関の自律性の回復を模索したアズハル文書の高評価につながっていると考えられる<sup>3</sup>。アブルファドルの政治思想の背景には常に、こうしたアラブ・イスラーム諸国における近代化と、その結果としてもたらされた学知の変容に対する省察と批判がある。

## 2. 近代のイスラーム的学知の批判からポスト世俗主義へ

アブルファドルは、イスラーム的な政治体制において、シャリーアはあくまで人間の努力によっては到達しえない神の完全性のための「象徴的な構築物」であるべきだと主張する (Abou El Fadl et al., 2004: 33; 2014: 310)。シャリーアは完全なものだが、イスラーム法学 (フィクフ) を通じて導出される諸々の法規定は、人間が介在する以上決して無謬なものではない。アブルファドルのこの主張自体は、近代以降のイスラーム改革思想の中で決して特異なものではない。むしろ近代のイスラーム改革思想は、シャリーアとフィクフの峻別を前提として、イジュティハードを通じた法解釈の刷新を主張してきた。

しかしアブルファドルは、シャリーアをめぐる言説の絶え間ない再検討が必要であるという立場を採るものの、非専門家が安易にイジュティハードを唱える論調に対して非常に抑制的な態度をとるとともに、シャリーアの国法としての採用は完全に否定している。シャリーアはむしろ、ムスリム諸国における自然法として認知されるべきだというのが彼の主張である (Abou El Fadl, 2014: 335)。

大衆教育の普及によって、専門的な宗教教育を受けていない多様なバックグラウンドを持つ人物がイスラームの語り手として台頭するようになった現象を、かつてアイケルマンとピスカトーリは「権威の断片化」と論じた (Eickelman and Piscatori, 1996)。さらに、20世紀後半に勃興したサラ

<sup>3</sup> アブルファドルの主張とは裏腹に、エジプトでは「アラブの春」を終わらせ軍人の支配を復活させたスィーサー政権が「宗教言説の刷新」をうたい、アズハルに対して圧力をかけ、その教育カリキュラムへの介入を強めていることが報告されている (Bano, 2018)。

フィー主義は、既存の注釈や解釈、学問的伝統を無視した、啓典のテキストの字句主義的な解釈を特徴とする。アブルファドルは当然サラフィー主義者的な知のありようを批判するが、イスラーム法学に関する表層的な知識しか持たずにイジュティハードを唱える改革主義的な知識人も、彼の批判を免れえないのである。

イジュティハードに対する抑制的な態度や、イスラーム諸学の伝統の重視ゆえに、彼の主張は、極端な事例では「法学至上主義の専制」（Khan, 2004）とも批判されてきた。また、アブルファドルがその政治思想において理想とするような、イスラーム諸学の伝統と、民主主義をめぐる政治理論の双方に通暁した人物は限られてくるであろう。彼の主張の実現可能性の薄さは、近代におけるイスラーム的学知をめぐる困難をそのまま反映しているように思われる。

イスラームに関する専門的な知識を持たない人びとが、こうしたシャリーアと政治をめぐるプロセスにどのように関われば良いかについては、イスラームと民主主義をめぐる著作（Abou El Fadl et al., 2004）と、現代におけるシャリーアの復権を問う著作（Abou El Fadl, 2014）の記述が示唆的である。

アブルファドルにとって、特に公的領域におけるシャリーアは「共同体のシステムの中で、どのようにしてよきムスリムであるべきかに関する現在進行形の言説、人類社会においてよき人間であるためのメタ的なナラティブ」であり、市民の間で共有される徳と神性に関する基準であり、究極の目的として、平和や平安といった価値を含むものである。さらにこれらの価値は、正義、調和、愛情や他者へのケアなしには存立しえないものであり、ここに彼は、シャリーアが保護しようとする法益（「生命、理性または精神、名誉、血統あるいは家族、財産」）とのつながりを見いだしてゆく（Abou El Fadl, 2014: 326）。

これは「シャリーアの目的（マカーシド・シャリーア）」を援用した議論である。近年、イスラーム政治思想において「シャリーアの目的」論への関心が高まっている。これは、具体的な法規定より、それを通じてシャリーアが保護しようとしている法益を重視する理論である。具体的には「宗教、生命、理性、財産、子孫（上記に加えて、または子孫の代わりに名誉）」の5種または6種の価値の保護を、シャリーアの究極の目的とみる見解が主流である<sup>4</sup>。

アブルファドルのポスト世俗主義的な政治思想においても、シャリーアの目的論が重要な位置を占めている。むしろ彼は、世俗主義やイスラーム主義といったイデオロギー論争にとらわれず、その政治体制を通じてどのような倫理的価値が実現されるかが重要であるという立場を採っており、シャリーアの目的論は、それぞれの共同体内やひいては人類社会において、多様な人間を結びつける装置として機能している。

人類は神の「地上における代理人」であり、人類そしてムスリムは、正義を実現し、善を勧め、悪を禁じる義務を負う（Abou El Fadl et al., 2004: 113）。アブルファドルの思想において、正義や平和といった価値は、イスラームと結びつきつつも、宗教を超えたある種の普遍的な倫理的価値として構想されている。イスラームに関する専門的な知識を持たないムスリムも、この公共のプロセスに参加することが想定されている。彼によれば、「シャリーアを志向する社会とは、政治的・法的な主権としてではない、神に関わる組織的なコミットメントが存在する社会」であり、その中で国家は、

<sup>4</sup> なおアブルファドルは、2014年の著作では、シャリーアの目的論の「宗教の保護」について政治論としては言及していないが、別の著作で「宗教の保護」は信教の自由の保障へ拡張されるべきとの見解を述べている（Abou El Fadl et al., 2004: 41n27）。

いかなる市民の権利も侵害しない範囲で、シャリーアに関する市民の言説の促進を支援することはできるといふ (Abou El Fadl, 2014: 327)。

ただし当然ながら、こうした公共のシステムを通じた「勸善懲悪」の実現は、20世紀後半以降、サラフィー主義者が政治進出する中で掲げてきた目標でもあることは付言しておかねばならないだろう。実際にムスリム諸国の中には、勸善懲悪省やいわゆる宗教警察を導入している地域が存在する。そうした彼らの構想に対抗するために、国家からの独立を取り戻したウラマーたちが、シャリーアが内包する倫理的価値に通じた存在として、市民社会における調停者としての役割を果たす必要があるのである (Abou El Fadl et al., 2004: 46)。

シャリーアと政治をめぐるアブルファドルの主張に関連して筆者が想起するのは、北米で活躍するサウディアラビア生まれの人類学者タラル・アサドが、パキスタン建国にも関わった父ムハンマド・アサドについて回想した講演録である。アサドは、近代国家が本質的に持つ暴力性について言及したうえで、父ムハンマドが信じたようなイスラーム国家の可能性を拒否する。しかし、国家と政治を峻別する視座に立ち、政治的イスラームの持つ可能性について、以下のように語っている。

政治は、公的な不一致、差異、論争、そして説得に関するものです。究極的には、それは正義と公的な徳の理念に基づくものであり、政党や政治的運動によって国家の政策に影響を与えるものです。しかし、政治は必ずしも「国益」によって制約されているわけではありません。政治は、国家によって規定されるものではないからです。歴史的にみると、宗教こそがこのような理念の重要な源泉をなすものであったのであり、現在もなおそうであるのです。ですから、私の考えでは、ムスリムにとって政治的なイスラームの持つ可能性とは、国家権力の行使や国家法の適用ではなく、公共的な議論と説得——すなわち国家による制約を超越しうる道徳的なコミットメントに導かれた政治的葛藤——に求められるべきなのです<sup>5</sup> (アサド, 2014: 175-176)。

アブルファドルとアサドの主張が立脚する文脈は異なるものの、国家と政治の峻別、徳の理念の源泉たりうる宗教という点においては、通底する部分もあるように思われる。アブルファドルの一連の主張は、北米の法学や宗教学の影響を受けていることが推測できるが、この点についてはまた今後の課題としたい。

#### IV. 今後の研究課題と展望

以上のように、現在筆者は、ハーリド・アブルファドルの思想を手がかりに、2010年代のアラブ諸国におけるイスラーム政治思想の展開について研究を進めている。今後の研究課題として筆者が構想しているのは、以下のような問題群である。

<sup>5</sup> ここで引用されているアサド (2014) の原典は、ムハンマド・アサドに関するシンポジウムで発表された論文 (Talal Asad, 2011. Muhammad Asad between Religion and Politics. Paper Presented at the Symposium on "Muhammad Asad: A Life for Dialogue," King Faisal Center for Research and Islamic Studies, Riyadh, 11-12 April) である。元の発表原稿と思われるアラビア語版の原稿が *al-Tafāhum* (相互理解) 誌に収録されているが (Asad, 2011)、同原稿の英語版については確認できなかった。ここでは、磯前順一・菊田真司によって訳された日本語原稿をそのまま引用した。なお、本シンポジウムの議論を拡張した英語論文があるが (Asad, 2012)、内容的にかなりの異同があり、上記の引用部分に相当する議論は含まれていない。

アブルファドルの政治思想において、シャリーアの目的論が重要な役割を果たしていること、彼の思想が世俗主義やイスラーム主義といった分類を超越するものであることは前項で述べた。彼の思想には、シャリーアの目的論を拡張して、人権をめぐるイスラーム法学的見解を構築しようとする傾向が見られるが（Abou El Fadl et al., 2004: 23–30）、アブルファドルに限らず、「シャリーアの目的論」の政治思想への影響は、イスラーム主義の内外でひろく観察されており、今後一層研究の余地がある。

イスラーム主義政党がシャリーアの目的論に言及する選挙綱領を作成し、福利の充実を訴える事例のほか、「シャリーアの目的論」に基づく政治思想のユニークな事例として、アメリカ、マレーシア、トルコ、インド、エジプト、モロッコなど各地のムスリム知識人が参加した「シャリーア・インデックス・プロジェクト」（Abdul Rauf, 2015）というものがある。これは、シャリーアの目的論がめざす各法益の保護をムスリム諸国がどの程度実現しているか数値化しようとした野心的な試みである。さらに、イスラーム国家による各価値の保護（宗教の保護、生命の保護、理性の保護……）とは一体どのような政策を指すのかを、可能な限り具体的に表現しようとしている点は注目に値する。地域や法学派の枠組みを超えた、知識人たちの国際的な試みという点でも興味深い。

アラブの春から約10年が経ち、革命後に一時躍進したイスラーム主義が停滞・退潮をみている地域も多いが、知識人の中でのシャリーアの目的論の隆盛にみるように、正義・公正・尊厳などの価値に根ざした政治と理念自体の訴求力は衰えていない。国際的な動向も見据えつつ、今後のイスラーム政治思想の展開を注視してゆきたい。

※ 本研究報告は、科研費・若手研究「民主化失敗以降のアラブ政治変動と穏健派イスラームの国際的思想構築」（課題番号20K20070、研究期間2020～2022年度）の研究成果の一部である。

## 参考文献

- アサド、タラル（2014）「宗教と政治のあいだで：我が父、ムハンマド・アサド」（磯前順一・菊田真司訳）島蘭進・磯前順一編『宗教と公共空間：見直される宗教の役割』東京大学出版会、169–186頁。
- アブ・エル・ファドル、カリード（2008）『イスラームへの誤解を超えて：世界の平和と融和のために』米谷敬一訳、日本教文社。
- 黒田彩加（2019）『イスラーム中道派の構想力：現代エジプトの社会・政治変動のなかで』ナカニシヤ出版。
- 長沢栄治（2014）「アズハルと2011年エジプト革命」『ODYSSEUS』（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）別冊2号、59–84頁。
- Abdul Rauf, F. 2015. *Defining Islamic Statehood: Measuring and Indexing Contemporary Muslim States*. New York: Palgrave Macmillan.
- Abou El Fadl, K. 2001. *Speaking in God's Name: Islamic Law, Authority and Women*. Oxford: Oneworld Publications.
- , et al. 2004. *Islam and the Challenge of Democracy: A Boston Review Book*. Princeton: Princeton University Press.
- . 2007. *The Great Theft: Wrestling Islam from the Extremists*. New York: HarperSanFrancisco.
- . 2014. *Reasoning with God: Reclaiming Shari'ah in the Modern Age*. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Asad, T. 2011. "Muhammad Asad bayna al-Dīn wa al-Siyāsa," *al-Tafāhum*, 34, pp. 407–421.
- Asad, T. 2012. "Muhammad Asad, between Religion and Politics," *Islam & Science*, 10 (1), pp. 77–88.
- Bano, M. 2018. "Al-Azhar University: A Crisis of Authority," M. Bano (Ed.), *Modern Islamic Authority and Social Change, Volume 1: Evolving Debates in Muslim Majority Countries*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 55–78.
- Eickelman, D. F. and J. Piscatori. 1996. *Muslim Politics*. Princeton: Princeton University Press.



- Khan, M. A. M. 2004. "The Primacy of Political Philosophy," K. Abou El Fadl, J. Cohen, and D. Chasman (Eds.), *Islam and the Challenge of Democracy: A Boston Review Book*, Princeton: Princeton University Press, pp. 63–68.
- Kuroda, A. 2021. "Modern Statehood, Democracy, and Women's Political Rights: The Reconstruction of Political Thought in Egyptian Moderate Islamic Trend," *Orient: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, 56, pp. 121–140.
- Moussa, M. 2015. *Politics of the Islamic Tradition: The Thought of Muhammad Al-Ghazali (Routledge Studies in Middle Eastern Democratization and Government Book 11)*. 1st ed. London: Routledge.
- . n.d. "The Shari'ah and Post-Secularisation in the Writings of Khaled Abou El Fadl and Abdullahi an-Na'im." Muslim Institute. <https://musliminstitute.org/freethinking/religion/shariah-and-post-secularisation-writings-khaled-abou-el-fadl-and-abdullahi> (accessed on September 2, 2019)
- al-Qaradāwī, Y. 2001 (1997). *Min Fiqh al-Dawla fī al-Islām: Makānat-hā, Ma'ālim-hā, Ṭabī'at-hā Mawqif-hā min al-Dīmuqrāṭiyya wa al-Ta'addudiyya wa al-Mar'a wa Ghayr al-Muslimīn*. 3rd ed. Cairo: Dār al-Shurūq.